

# 令和7年度版「学力向上ポータルポートフォリオ(学校版)」【岩槻中学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	基礎的・基本的な学力を充実させるためには授業の中で基礎的・基本的な問題に多く取り組むことが大前提である。しかし、高い学力を有している生徒の伸びを充実させるためには、生徒が家庭学習など自主的な学習によって基礎的・基本的な学習内容を定着させることができるよう適切に補助していく必要がある。そのためには知識・技能を習得するにほかに学習すれば良いか、どのような学習がそれぞれの生徒にとって効果的であるかを教師が提示し、それを生徒が選択して取り組むなど、生徒が自ら進んで学習できるように導いていくことが肝要であるといえる。教材・教具、授業案の選定や練り上げ、活用方法等を追求することはその一助となると考えている。
思考・判断・表現	授業の場で基礎的・基本的な学習に終始していると思われ、思考力・判断力・表現力を高めていくことが困難になる。そのため授業の場でこそ主体的・対話的で深い学びの機会を設定していくことが求められる。単元のゴールやその中途に主体的・対話的で深い学びを位置づけることの解決のために、基礎的・基本的な内容として習った事項が必要になる学習計画を設定することなどを通して、思考力・判断力・表現力等を身につけていくことが効果的手法の一つであると考えられる。引き続き職員間の研修を通して、その他具体的な手法を検討したり提案性のある授業を共有したりしていくことが求められる。

今年度の課題と学力向上策		
①	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 漢字の読み書きや基本的な計算、英単語の暗記など「知識・技能」の定着に差が見受けられる。 <指導上の課題> 学習意欲が高い生徒については、授業や家庭での学習に集中して取り組めていない。	⇒ 授業中に基礎的な問題に取り組む時間を設けるなど、学習意欲の向上を図る。【主に授業開始時】 学習の見通しを生徒に示すことを通して、生徒が学校・家庭等で主体的に学習・復習に努めることができるようにする。【単元や授業の導入時】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 意欲的に授業に取り組んでいるものの、課題解決に向かう粘り強さに課題がある生徒がみられる。 <指導上の課題> 思考力・判断力・表現力等の育成に重点を置いた学習活動を設定しづらい。	⇒ 魅力的な学習課題の設定、生徒が主体的・協働的に課題解決に取り組む学習過程を重視するなど、学習課題を自分事と捉え、進んで解決に向かうとする生徒の姿を追求する。【単元構築段階、単元の中に位置付ける】

<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	授業で基礎的な問題に取り組む時間を充実させることができている。しかし、それに注力すると学力の高い生徒の深い学びの機会が必然的に減少してしまうため、基礎と応用・発展のバランスの追求や、家庭学習による補充の方法等を引き続き検討していく必要がある。学校内の研修において三つの視点からの授業改善を図り、特に生徒が学習の見通しをもつことを大切に、1時間の学習や単元を通じた学習の計画を提示することで学力向上のための地盤を築く取組を重視した。それが学習・復習に繋がるような主体的な学習態度の育成や、具体的な学習方法を生徒に積極的に提示・紹介するなど、アフターフォローの充実を図っていきたい。
思考・判断・表現	B	生徒は自分たちに身近な事象や自分たちにとって切実な問題に対する学習においては、高い学習意欲をもって取り組むことができている。ただし、全ての学習事項において上記に関連付けることは容易ではないため、自分たちとの関連を教師が生徒に伝えたり、場合によって生徒が自分で考えてみるなど、自らの学習を体系化したり、概念化したりしながら学べる授業づくりを研修における重点の一つとしてあげることができる。また、教師が生徒に学習の必然性をつくったり、学習意欲を高める工夫をそれぞれに創意・工夫すること、学力向上を図ることができる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	数学の「数と式」に関する出題における無回答率が低く、結果的に正答率が全国(公立)と比較して高い傾向がある。一方で、「図形」に関する出題においては無回答率が高く、やはり正答率が低くなっている。理科においては、「粒子」を柱とする領域において、元素記号などの基本的な知識及び技能の定着度が全国(公立)に比べて大幅に上回るなど、学習内容に応じてできる分野、できない分野がはっきりしているように思われる。これらのことから、授業で取り上げ、十分な説明や生徒自身の理解がなされている内容については力を発揮しているものの、授業で重点的に取り扱うことのできていない単元等においては課題があり、自分で進んで学習する力が高いとは言えず、授業だけが学習の機会になっている可能性を見出すことができる。
思考・判断・表現	国語の「書くこと」(主に文章を書いたり、整えたりすること)に関する出題において、無回答率が高くなる傾向がある。それにも関わらず、正答率は高いという問題が見受けられるため、書ける生徒は書く、書かない生徒は書かないという二極化が起きているといえる。数学において、説明的な解答が求められる出題に対する正答率は全国(公立)と比べて低くなるかと思われたが、こちらは大きく上回っている。ただし、「数表的な表現を用いて」説明するという条件が付与されているため、国語のように言語・やや長い文章ではなく、数字や記号を用いた説明の力は備わっていると考えられる。また、理科においては、ほとんどの問題で全国(公立)の正答率を上回っているものの、「身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるか」という出題においては、正答率が大幅に低くなっているため、課題設定能力やそれを言語によってより良く表現し、解決しようとする力に課題があると懸念することができる。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語の文語のきまりに関する問いにおける誤答及び無解答が目立った。また、文脈に即して漢字を使ったり文の構造を理解したりする際に課題がみられる。数学においては数と式、関数の領域における解答に課題がみられた。一次関数の変化の割合に関する問題では、特に誤答及び無解答が他の設問に比して際立っていた。社会は地球上の位置や大陸、海洋などの分布、日本の地形や気候の特色への理解度がやや低い傾向にある。理科においては、ルーペの操作方法や合併花類の花のつくり、動物のからだの特徴などにおける理解度が高くなっている。一方で電流の大きさや大地のすれに関する知識の理解度には課題がみられる。これらのことから、日常的に触れていない知識、例えば文語のきまりや理科、社会における特定の分野などにおいては、正答率及び解答率が低くなりやすいと考えられる。一つの方針の学習に費やす時間を1年間を見通した総合的な観点から吟味・検討したり知識・技能を進んで身につけようとする主体性を養ったりする必要がある。
思考・判断・表現	自分の考えを分かりやすく伝えるように表現する力がある一方で、場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写をもとに捉える力には課題がみられる。また、具体例と書き手の主張との関係を捉えながら内容を把握することの正答率が低い傾向から、面と向かって、あるいは同世代とのコミュニケーションにおいて力を発揮するものの、作品の人物たちや著者の思いや意図を考えることを不得手としていると考えられる。数学においても表やグラフから必要な情報を適切に読み取ることを課題とするなど、文章などの読み取りを通して多様な見方・考え方を文章に読めながら必要な情報を得て思考する経験などを家庭・学校で拡充していかないと効果的だろう。社会では、たとえば地球の課題の要因や影響を考察する問いにおいて課題がみられることや、理科の実験結果から、設問の答えを判断する箇所を見出すことに課題があることが、情報に触れ判断したり、根拠を見出したりして深く思考する経験の必要性や重要性を裏付けていると考えられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	「知識及び技能」の定着に向けた、基礎的・基本的な学習の時間を確保することはできていると感じている。一方で、その定着状況はやはり個人によって差があるため、学習に課題を感じている生徒や家庭で学習に取り組むことが習慣になっていない生徒にどのように学習支援を行っていくかということを検討していく必要がある。	学習の見通しを生徒に示し学習・復習に努めることができるようにした上で、どのように取り組むとよいか、どのように評価するかなど伝えたり、基礎的・基本的な部分については宿題にしたりして、学習に対し課題を感じている生徒への支援を教科の特性等に応じて充実させていく。【単元や授業の導入時】
思考・判断・表現	B	授業に対する意欲はあり、課題に向き合う粘り強さは徐々に身につけてきているように思われる。特に思考力・判断力・表現力等の育成に重点を置いた学習活動を単元の中に位置づけるよう、試行錯誤を重ねている。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)